第十三回「三土新明会」

南部こけしの世界（下）

橋本 正明

Sep.19, 2015

南部の木地師

御領分物産取調書(享保年間)：盛岡市中央公民館蔵

○ 二子万丁目通

- 木地るい：湯口、志戸平の二村より出る　塗物るい右同断

○ 雫石通

- 御器：　雫石町より出る

○ 大迫通

- 漆　：　内川目村

○ 福岡通

- 蝋　：　惣村より出、御役生蝋五十貫目ほど上納
- 漆　：　惣村より出、御役水漆同断
- 蝋燭：　福岡、一戸町
- 御器るい：　荒屋、中佐井、大清水の三村より出

○ 花輪通

- 椀、木地るい：田山村

「通」とは何か？

南部藩の行政区画で代官の統治区域を「通（とおり）」と称していた。代官区は左の三十三区であった

岩手郡	上田通、厨川通、雫石通、向中野通、沼宮内通
志和郡	飯岡通、長岡通、日詰通、見前通、徳田通、伝法寺通
稗貫郡	大迫通、八幡通、寺林通、高木通、万丁目通
和賀郡	沢内通、黒沢尻通、鬼柳通、安俵通、二子通
閉伊郡	大槌通、宮古通、遠野通
九戸郡	野田通
二戸郡	福岡通
三戸郡	三戸通、五戸通
鹿角郡	花輪通、毛馬内通
北郡	七戸通、野辺地、田名部通

□：木地屋がいた「通」

右のうち、一つの代官所で、二通を兼ねて所管したものがあり、代官所の数は二十五であった。

例えば、二子と万丁目は一つの代官所で、二子万丁目通と呼ばれることもあった。

御領分物産取調書
享保年間の南部領内木地師

キナキナ製作にかかわる南部地方の木地師のグループ

① 安保一家とその弟子筋

元禄年間に美濃より秋田県鹿角郡安保へ移動して木地業を営み、
後に浄法寺の荒屋地区に移った。
享保年間に南部藩より二人扶持を与えられてお抱え木地師となり、盛岡に移住した。

② 志戸平の佐々木一家

佐々木家は代々花巻城の家老職を務めていたが、南部利直候（1576～1632）が慶長18年に花巻城に入城したあと意見が対立して二子城へまわされた。これを快しとせず、城を去って志戸平に移った。その初代覚平より志戸平で木地を始めた。

③ 傘ロクロ師

花巻は京都、岐阜、金沢などの並んで、江戸末期から明治にかけて和傘の産地として知られた。傘のロクロを挽く工人も多くいた。

④ 他産地からの影響や県の産業振興政策によるこけし

a. 鳴子から来たこけし工人とその影響
b. 青根で学んだ照井音治
c. 工業試験場の技師の図案
d. 業者によるこけし

前回の補足

寺沢七郎の聞書　　こけし手帖･655参照

写真をクリックすると寺沢七郎の話を聞くことが出来ます。

（すこし立ち上がりに時間がかかります）

キナキナ製作にかかわる南部地方の木地師のグループ

① 安保一家とその弟子筋

元禄年間に美濃より秋田県鹿角郡安保へ移動して木地業を営み、
後に浄法寺の荒屋地区に移った。
享保年間に南部藩より二人扶持を与えられてお抱え木地師となり、盛岡に移住した。

② 志戸平の佐々木一家

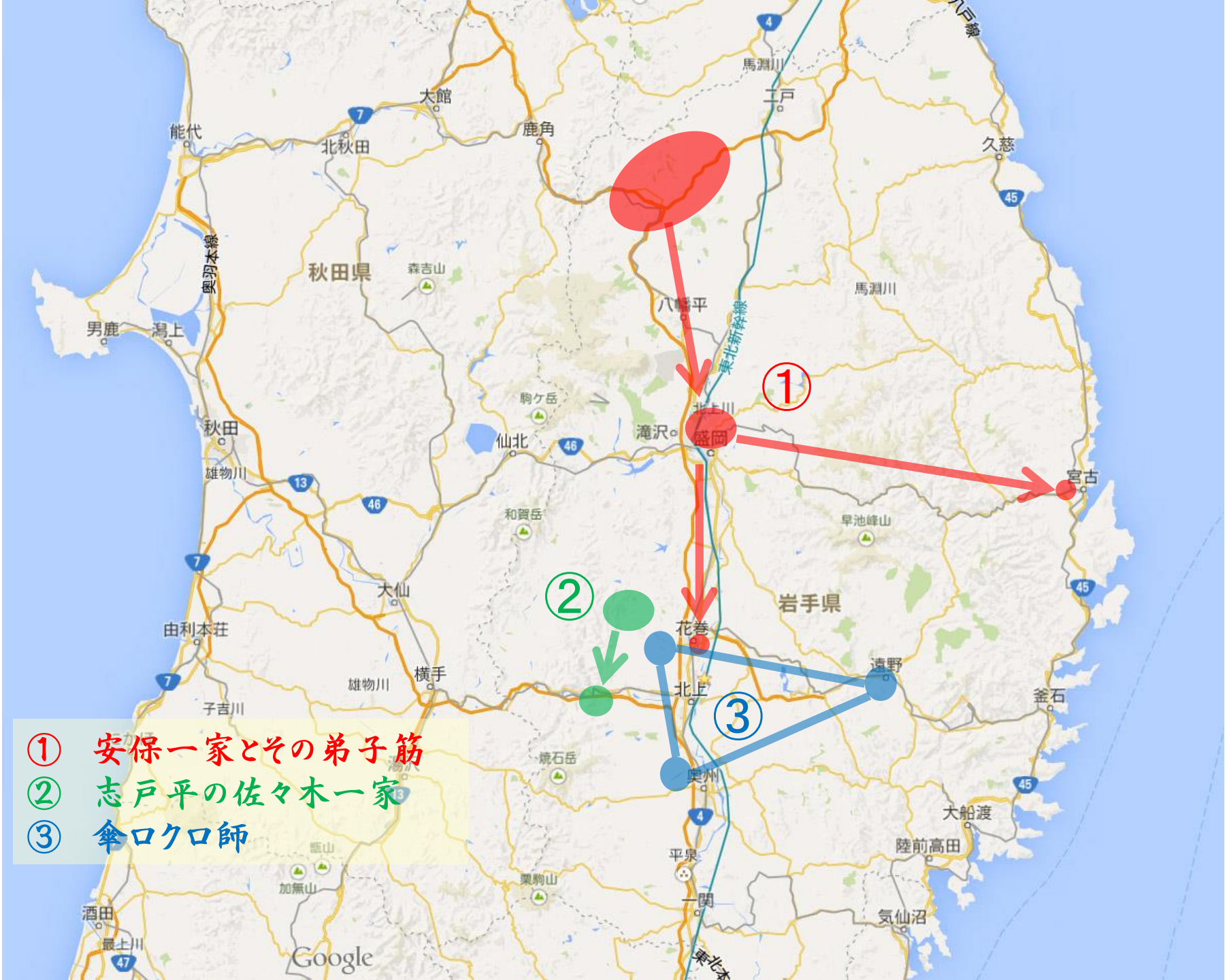
佐々木家は代々花巻城の家老職を務めていたが、南部利直候（1576～1632）が慶長18年に花巻城に入城したあと意見が対立して二子城へまわされた。これを快しとせず、城を去って志戸平に移った。その初代覚平より志戸平で木地を始めた。

③ 傘ロクロ師

花巻は京都、岐阜、金沢などの並んで、江戸末期から明治にかけて和傘の産地として知られた。傘のロクロを挽く工人も多くいた。

④ 他産地からの影響や県の産業振興政策によるこけし

a. 鳴子から来たこけし工人とその影響
b. 青根で学んだ照井音治
c. 工業試験場の技師の図案
d. 業者によるこけし


①
②
③
① 安保一家とその弟子筋
② 志戸平の佐々木一家
③ 傘ロクロ師
秋田県
岩手県
能代
大館
鹿角
北秋田
二戸
久慈
男鹿
潟上
秋田
森吉山
八幡平
馬淵川
東北新幹線
駒ケ岳
仙北
滝沢
盛岡
宮古
雄物川
和賀岳
早池峰山
大仙
由利本荘
横手
花巻
遠野
釜石
北上
子吉川
焼石岳
奥州
大船渡
陸前高田
平泉
栗駒山
一関
気仙沼
酒田
最上川
加無山
Google

佐々木一家の移動経路

佐々木家は代々花巻城の家老職を務めていたが、南部利直候（1576～1632）が慶長18年に花巻城に入城したあと意見が対立して二子城へまわされた。これを快よしとせず、城を去って志戸平に移った。その初代覚平より志戸平で木地を始めた。

佐々木家の系図

覚平―与四郎―甚太郎

角平―善七―与市

角次郎―与始郎―覚平

要吉

与五郎

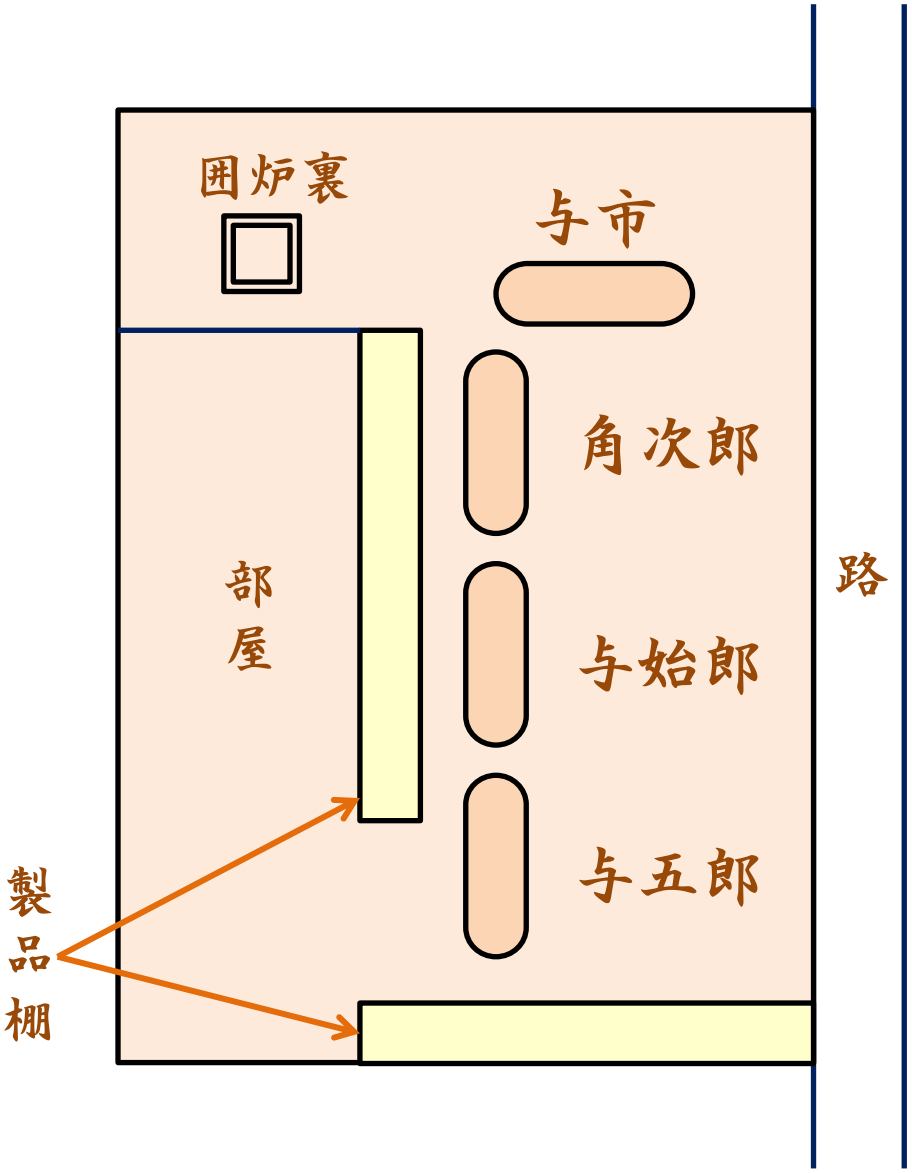
佐々木覚平

佐々木与始郎

佐々木与市　（天保七年ー大正三年）
佐々木角次郎（安政六年ー明治四十年二月）
佐々木与始郎（明治十九年ー昭和二十六年）
佐々木与五郎（明治二十六年ー　　）

佐々木要吉（明治十一年ー大正二年）
明治三十七年に上根子伊藤文次郎の養子
佐々木セン　明治四十二年与始郎と結婚

要吉のこけしはセンが描彩を始める前の古い志戸平の形態を残している。
一方、マント型のこけしなど各種工夫もした人だったという。



志戸平の佐々木一家の作業場と店
（明治三十九年頃）

雜誤愚談

田中純一郎

第十九號（昭和十七年三月）

○山田猷さんや川口貫一郎さん達が、名刺をおいて、惜しくも逢はずに歸つた二三日後、横黑線横川目に佐々木與始郎を訪ふ、與始郎は不在で、二人の子供を兩脇に、ブク〳〵太つた與始郎こけしそつくりな女房が五燭ほどの薄暗い電燈の下で話した珍談、

おとつさんは今は秋田の製材へ勤めてゐます、わしらは志戸平から十一年前にこの土地へ來ました、こゝを開墾して百姓をする爲です、百姓の合間には仕事に行きます、こけしを作るのは冬の雪の時だけです、與シ郎は本當は與ハチ郎です、シもハチもハジメといふ字を書くんださうですが、どこで間違つたのかハチがシに變つて手紙が來るやうになつて、この頃は皆がヨシロ〳〵でよこします、わしらには譯がわかりません、（此の女房は無筆なので間違ひの譯が解らないのだらうが、ハチをシに間違へたのは通信を書くこけし蒐集家ではないかナ）按ずるに與初郎が本名なのであらう、こけし作りとは、このやうに愛すべきとぼけた御連中なのである、與ハチ郎のおやぢが角次郎で、角次郎の弟に與吉といふのが居り、その兄弟のおやぢ、つまり私共のおぢいさんの與平次、この三人共こけしを挽きました、與平次は今から二十年前に七十九で死に、角次郎は四十九で、與吉は三十七で各々死にました、おとつさんの弟の與五郎も若い時はこけしを挽きましたが、今では花卷でまんじゆ屋をしてゐます、こけしを作るよりまんじゆ屋の方がいゝさうです、今は材料が思ふやうに入らんでせうが、家のおとつさんもこゝの畑を買つて引越して來てからは、畑仕事の方が忙がしくて餘程人に賴まれた時でゞもなければこけしは作りません、桐で挽いたものはおとつさんも自慢でわしらにも見せたりします、云々。

いまは雪の季節だから、秋田の製材から歸つたらう、與初郎か與始郎かは、戸籍抄本でも取寄せて見たら謎は解けませう。

聞き取りの間違い

- 與平次　→　與市（与市）
- 與吉　→　要吉　大正2年36歳没だから年齢はほぼ正しい
  角次郎の戸籍上の没年齢49歳は一致している
  センの話はほぼ正確。

佐々木一家と思われる古作

天江旧蔵品

らっここれくしょん

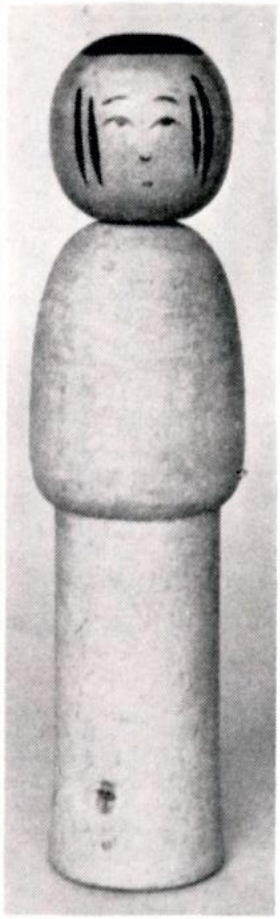
佐々木一家か？

佐々木要吉か？

佐々木与始郎の戦前のこけし

志戸平　大正6年頃

横川目　昭和7年頃



志戸平古型
（鹿間氏蔵）

要吉が工夫したというマント型

佐々木与始郎の弟　与五郎

明治三十八年十三歳の夏から木地を習い始めた。はじめはコマ、こけしなどを挽いた。角次郎の弟の要吉のこけしは見たことが無いのでどんなものかわからない。私が木地を習い始めた明治三十八年頃、三越から大量のこけしの注文が来て、家族で挽いた。

大正三年入隊するまで志戸平で木地を挽いた。大正六年兵役除隊後一時志戸平に戻ったが、すぐに花巻に出てまんじゅう屋を始めた。そのときもって来たこけしがこれだ（前頁カラー写真　左）。

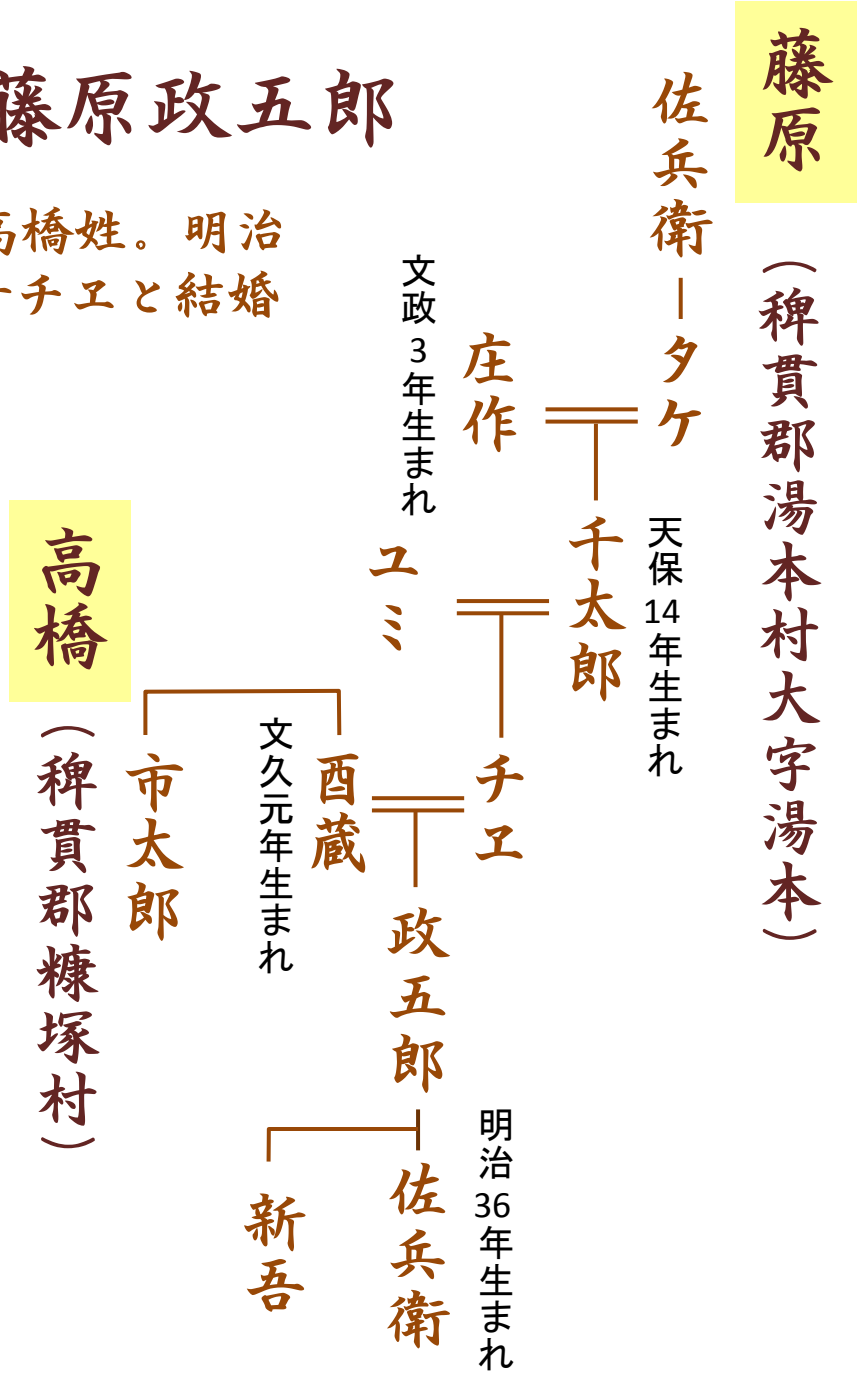
佐々木与五郎
（昭和44年撮影）

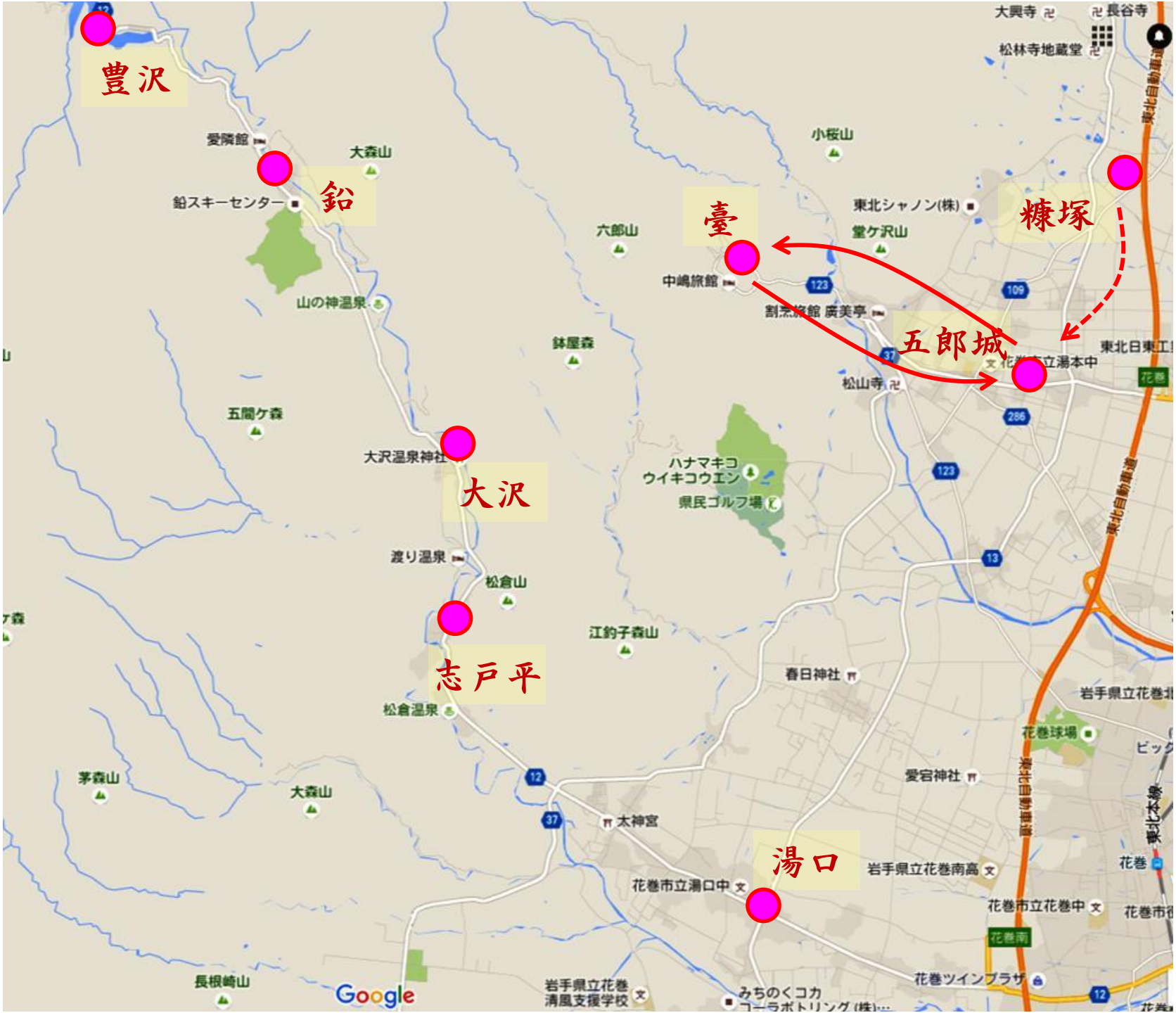
藤原酉蔵・藤原政五郎

藤原酉蔵（文久元年糠塚村生まれ）　高橋姓。明治15年湯本村（五郎城）の藤原千太郎長女チヱと結婚して婿養子となる。

木地の系譜は不詳。一説には藤原家は代々木地屋で養父千太郎より習得、また一説には秋田方面で木地を習得してきたとも言う。
夏季に臺温泉で木地を挽いたらしい。
〈木形子談叢〉で橘文策は「6代前の佐兵衛の代からこけしを作っている。」という聞書を得ている。
おそらくキナキナのことであろう。

伝酉蔵作が天江コレクションに2本、石井眞之助旧蔵に1本ある。
天江蔵は豊沢にて入手、石井旧蔵は〈こけし手帖·69〉に酉蔵として紹介されている。




豊沢
鉛
臺
糠塚
五郎城
大沢
志戸平
湯口
愛隣館
大森山
鉛スキーセンター
山の神温泉
六郎山
小桜山
東北シャノン(株)
堂ケ沢山
中嶋旅館
割烹旅館 廣美亭
鉢屋森
松山寺
五間ケ森
大沢温泉神社
ハナマキコ
ウイキコウエン
県民ゴルフ場
渡り温泉
松倉山
江釣子森山
春日神社
松倉温泉
茅森山
大森山
太神宮
花巻市立湯口中
岩手県立花巻南高
花巻市立花巻中
花巻球場
愛宕神社
花巻ツインプラザ
長根崎山
岩手県立花巻
清風支援学校
みちのくコカ
コーラボトリング(株)
大興寺
長谷寺
松林寺地蔵堂
東北自動車道
Google

藤原酉蔵のこけし

天江富弥蒐集品

石井眞之助蒐集品

酉蔵こけしの様式

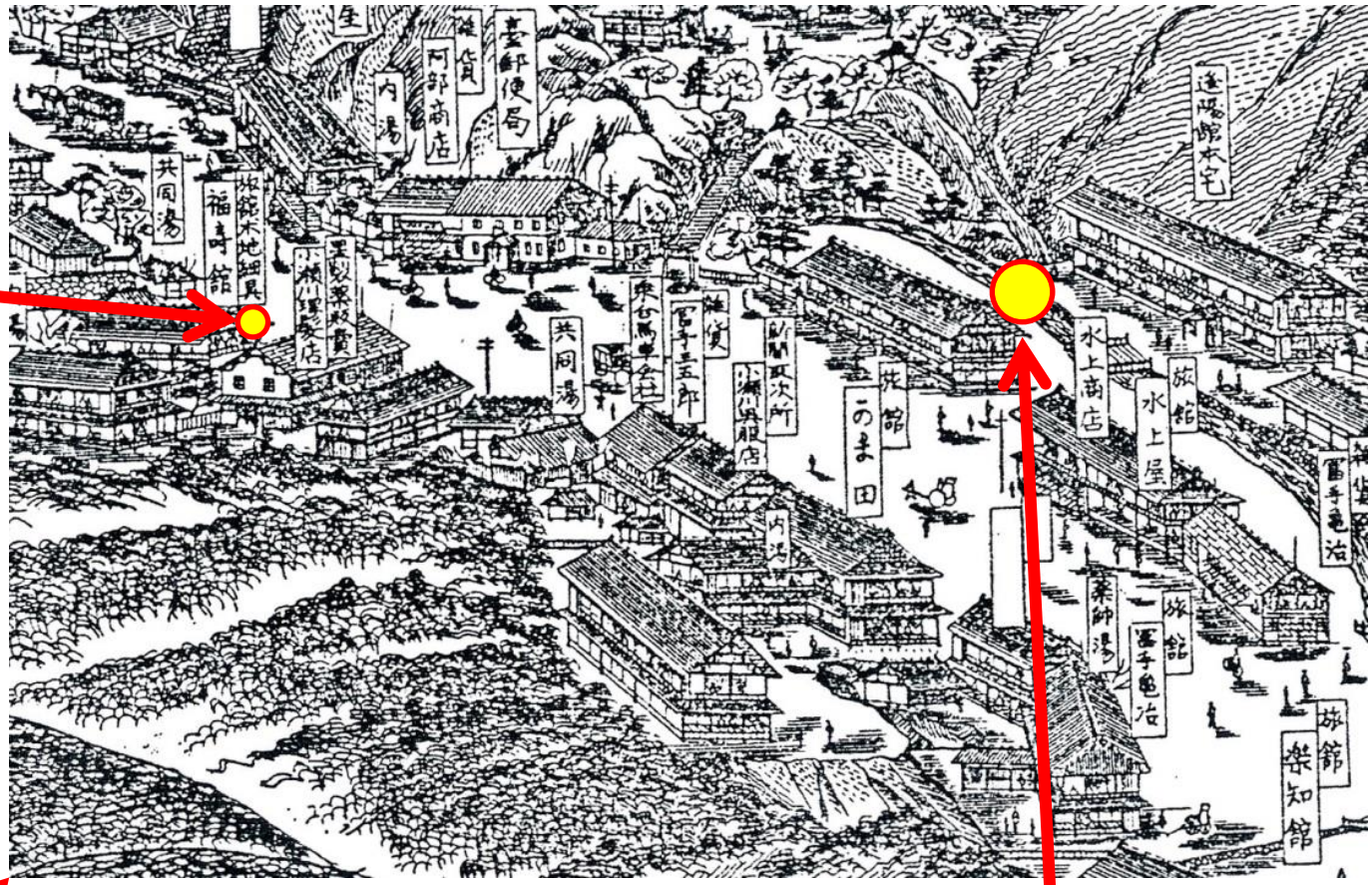
あごの線

政五郎と同様の
赤の緑のロクロ模様

藤原政五郎のこけし

高橋寅蔵が
木地を挽いて
いた福寿館
女将 富手ミナ

オヨウ婆さんが
藤原作兵衛
（政五郎か？）
橋文策聞書
〈教室だより・50〉



鎌田千代松が川の上に板を渡して木地を挽いていたのは、この辺り
（現 松田屋旅館の裏手）

大正5年ころの臺温泉地図

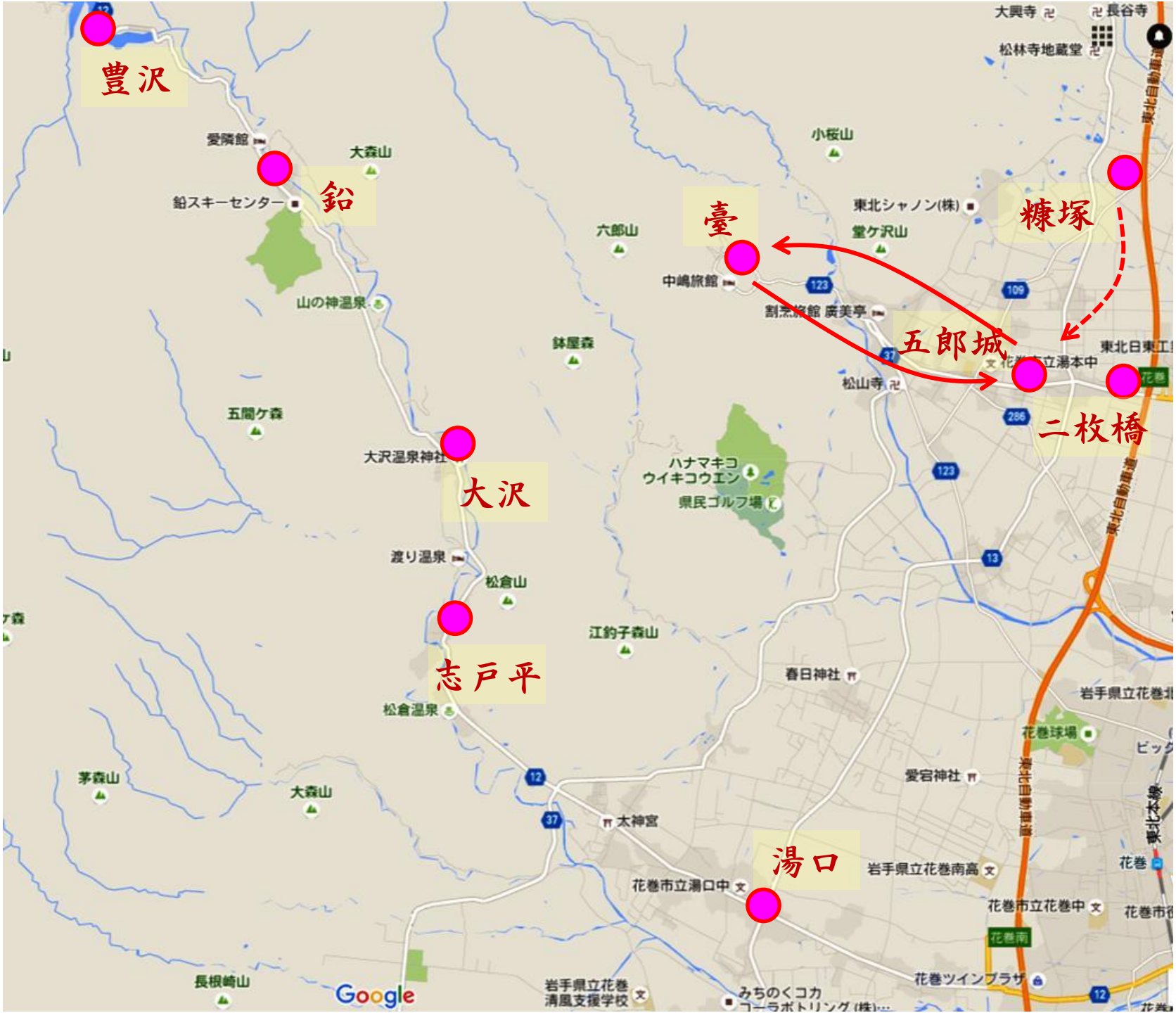
橘文策 聞書 〈教室だより・50〉

「臺のこけし」

鎌田千代松に続いて現れたこけしは、明治四十年以後で、福寿館の女将富手ミナさんが、臺温泉からこけしの無くなったのを淋しがって、挽物産地として名高い宮城県鳴子温泉から職人を呼んで来て、こけしを作らせて、大正時代に至るまで続けたという。

想うに、これは鳴子の工人高橋寅蔵が、近郷鉛温泉から臺温泉に移ったことではなかったろうか、明治43年から三年間、臺温泉で職人、店出し等をしていたという彼の経歴に符合する。往年の青年工寅蔵は、この地で、腕に物を言わせて、野趣に富んだ、可憐なこけしを多数ものしたことであろう。

寅蔵が鳴子に引き揚げてからは、オヨウ婆さん（姓不詳、宮城県古川の産だった）が、地元の藤原作兵衛を雇い入れて、こけしその他の挽物を製作させた、この藤原は、湯本村大字二枚橋の産で、本業は農であったが、ロクロを繰ることも出来た。藤原は独立して、農業のかたわら木地を挽き、こけしその他を作っては、地元の湯宿や土産物屋などで売り捌いていた。


豊沢
鉛
臺
糠塚
五郎城
二枚橋
大沢
志戸平
湯口
愛隣館
大森山
鉛スキーセンター
山の神温泉
六郎山
小桜山
東北シャノン(株)
堂ケ沢山
中嶋旅館
割烹旅館 廣美亭
鉢屋森
五間ケ森
大沢温泉神社
ハナマキコ
ウイキコウエン
県民ゴルフ場
渡り温泉
松倉山
松倉温泉
江釣子森山
春日神社
茅森山
大森山
太神宮
花巻市立湯口中
岩手県立花巻南高
花巻市立花巻中
花巻ツインプラザ
長根崎山
岩手県立花巻
清風支援学校
みちのくコカ
コーラボトリング(株)
愛宕神社
花巻球場
松林寺地蔵堂
大興寺
長谷寺
松山寺
東北日東工
東北自動車道
Google

藤原

（稗貫郡湯本村大字湯本）

- 佐兵衛
  - タケ　天保14年生まれ
    - 千太郎
    - 庄作
    - ユミ　文政3年生まれ
    - チエ
    - 酉蔵　文久元年生まれ
      - 市太郎
      - 政五郎　明治36年生まれ
        - 佐兵衛
        - 新吾

高橋

（稗貫郡糠塚村）

藤原の家は代々屋号が「佐兵衛」だったかも知れない。橋文策聞書「作兵衛」がもし「佐兵衛」の聞き間違い、あるいは臺の人の記憶違いだったとすれば、オヨウ婆さんが雇い入れたのは藤原酉蔵、政五郎あるいは長男佐兵衛だった可能性が高い。

キナキナ製作にかかわる南部地方の木地師のグループ

① 安保一家とその弟子筋

元禄年間に美濃より秋田県鹿角郡安保へ移動して木地業を営み、
後に浄法寺の荒屋地区に移った。
享保年間に南部藩より二人扶持を与えられてお抱え木地師となり、盛岡に移住した。

② 志戸平の佐々木一家

佐々木家は代々花巻城の家老職を務めていたが、南部利直候（1576～1632）が慶長18年に花巻城に入城したあと意見が対立して二子城へまわされた。これを快しとせず、城を去って志戸平に移った。その初代覚平より志戸平で木地を始めた。

③ 傘ロクロ師

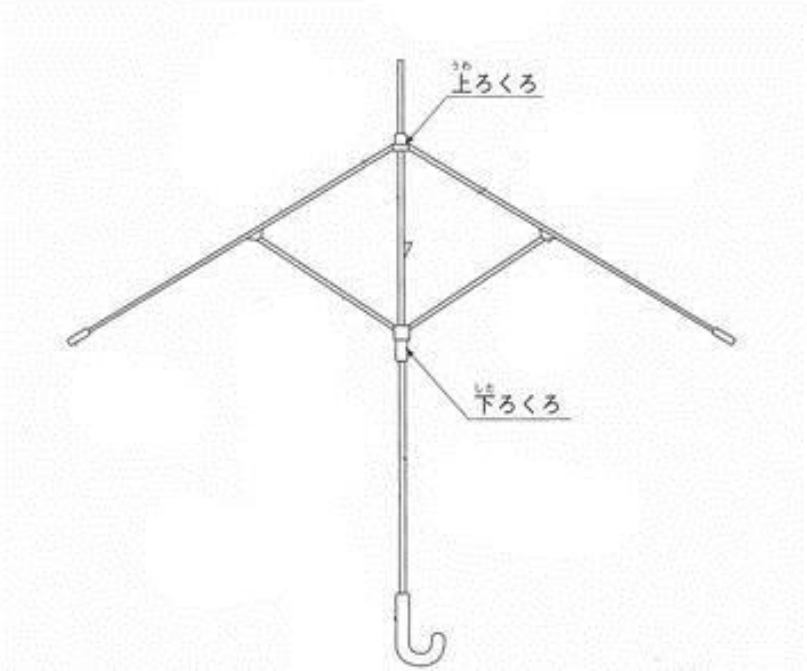
花巻は京都、岐阜、金沢などの並んで、江戸末期から明治にかけて和傘の産地として知られた。傘のロクロを挽く工人も多くいた。

④ 他産地からの影響や県の産業振興政策によるこけし

a. 鳴子から来たこけし工人とその影響
b. 青根で学んだ照井音治
c. 工業試験場の技師の図案
d. 業者によるこけし

傘ロクロ

花巻和傘は、享和年間　（1801年）のころ肥後熊本の武士千葉左近が流浪して来て、糊口のため花巻で傘作りの内職をしたのが始まりといわれている。明治維新後は本職で製作されるようになり、大正８、９年には年間２５万本ほどを生産される花巻物産の一つとなった。



五郎城の藤原政五郎や岩谷堂の佐藤七之助は主に傘のロクロを挽いていた。
明治末期から大正期に花巻近辺に出稼ぎに来ていた工人の多くは傘ロクロを挽いた。
伊藤松三郎も花巻では主に傘ロクロを挽いた。日光今市で傘ロクロの技術を習得したのが役立ったと言っていた〈鳴子・こけし・工人〉。

キナキナ製作にかかわる南部地方の木地師のグループ

① 安保一家とその弟子筋

元禄年間に美濃より秋田県鹿角郡安保へ移動して木地業を営み、
後に浄法寺の荒屋地区に移った。
享保年間に南部藩より二人扶持を与えられてお抱え木地師となり、盛岡に移住した。

② 志戸平の佐々木一家

佐々木家は代々花巻城の家老職を務めていたが、南部利直候（1576～1632）が慶長18年に花巻城に入城したあと意見が対立して二子城へまわされた。これを快しとせず、城を去って志戸平に移った。その初代覚平より志戸平で木地を始めた。

③ 傘ロクロ師

花巻は京都、岐阜、金沢などの並んで、江戸末期から明治にかけて和傘の産地として知られた。傘のロクロを挽く工人も多くいた。

④ 他産地からの影響や県の産業振興政策によるこけし

a. 鳴子から来たこけし工人とその影響
b. 青根で学んだ照井音治
c. 工業試験場の技師の図案
d. 業者によるこけし

花巻近郊で木地を挽いた工人

鳴子系工人

- 鉛
  - 大沼岩蔵　（明治36年～38年）
  - 鈴木庸吉　（明治39年）
  - 大沼甚四郎・小松留三郎・遊佐養右衛門　（明治40年）
  - 小松五平・伊藤松三郎・高橋万五郎　（明治41年）
  - 高橋寅蔵・大沼万之丞・秋山忠　（明治42～43年）
  - 柴崎丑次郎　（大正6年）
- 臺
  - 高橋寅蔵　（明治43年～明治45年）
  - 鈴木庸吉　（大正5年）・大沼甚五郎（大正期）
- 志戸平
  - 伊藤松三郎・高橋寅蔵　（明治40年代）
- 花巻・盛岡
  - 高橋万五郎・遊佐平治郎・遊佐吉男・遊佐養右衛門・伊藤松三郎・岸正男　（花巻：明治43年～大正2年）
  - 高橋万五郎・遊佐平治郎・遊佐吉男・岸正男　（盛岡：大正2年～8年）

遠刈田系工人

- 西鉛　照井音治　（明末正初）
- 鉛　照井音治　（大正中期～末期）　弟子：藤井梅吉
- 花巻　南部木工　照井音治・佐藤文作・佐藤文助・佐藤好秋・佐藤正吉・佐藤善作　（大正14年）

臺で発見されたこけし

這子の話・臺のこけし

らっここれくしょん
伝 鎌田千代松

米浪氏発見の臺こけし

照井音治

明治35年青根で小原直治について木地を学んだ。その後諸国を転々とし、明治末期に西鉛の藤友旅館の職人となり、大正中期に藤井梅吉に木地を教えた。

藤井梅吉

佐藤七之助

岩谷堂の出身。15歳の時及川吉三に師事してダライバンによる木地挽きを学んだ。
当初は椀類を主として挽いていたが、のちに和傘のロクロ部分を簡単に挽ける芦川式傘ロクロ機を静岡から導入し、花巻の高橋悟郎、八重樫与五郎らと
協定を結んで傘のロクロの生産を行った。

キナキナは桑で頭を作ったと七之助本人は語っていた。桑の樹液には薬効があり、子供がしゃぶれば病気知らずと言われていると語っていた。（盛岡寺沢の話と同じ）

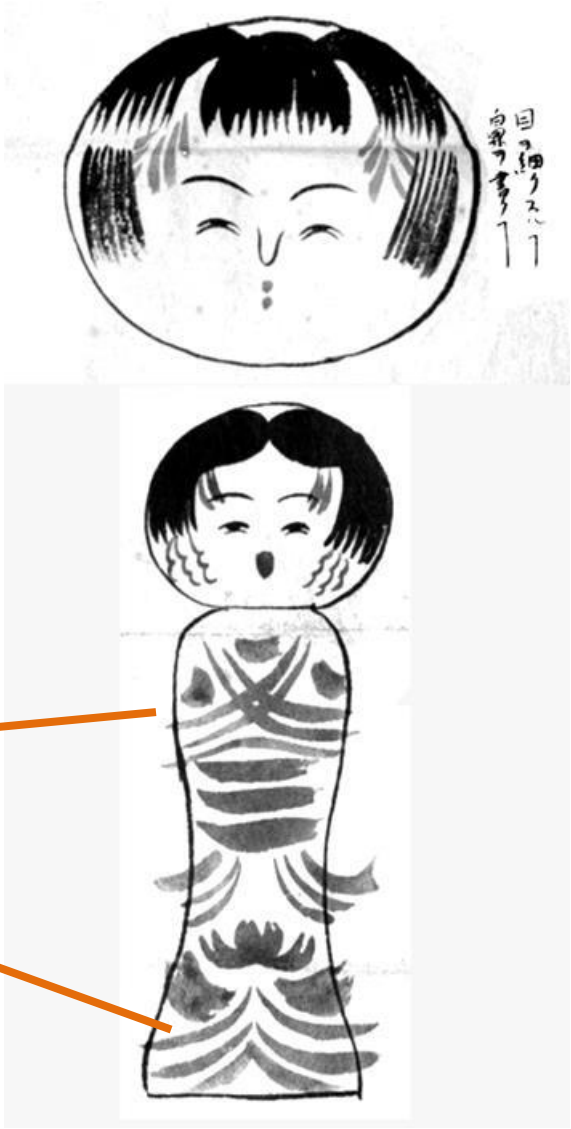
昭和13年頃、岩手県工業試験場技師岡安太郎の図案によるこけしを製作したことがある。

佐藤七之助のこけし

岩手県工業試験場　岡安太郎の図案

深沢コレクション

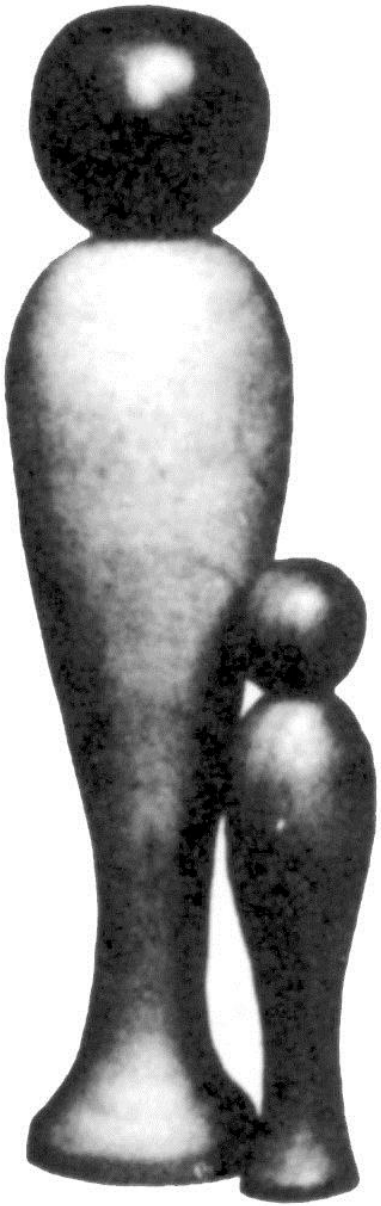
岩手県工業試験場　岡安太郎の図案



安保一郎

安保一郎の描彩も岡安太郎の図案によるのだろう。
基本模様の図形は、安太郎図案と一致する。

及川吉三のキナキナ



〈こけし這子の話〉図版　遠野のキナキナ

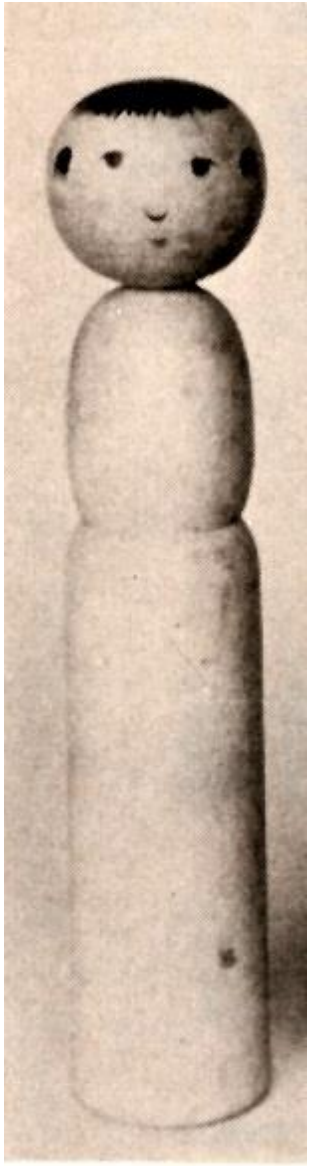
岩谷堂、鱒沢、遠野、水沢で木地を挽き、各地でキナキナを作った。

橋文策　昭和七年に花巻で入手したこけし

業者によるこけしがいくつも混じっている
花巻の長寿庵は大正12年に奥野伝次郎により創業。
（近江商人でカーテンを扱っていた。震災後、東北の宝塚と期待された花巻で一旗上げようと東京から移り住んだ。）

花巻町内で見つけたこけしのいろいろ　〈こけしざんまい〉

昭和13年ヒトラーユーゲントが花巻温泉に
来たときに長寿庵がお土産として作らせたこけし。
木地：煤孫実太郎、描彩：島倉吉



長寿庵

キナキナ製作にかかわる南部地方の木地師のグループ

① 安保一家とその弟子筋

元禄年間に美濃より秋田県鹿角郡安保へ移動して木地業を営み、
後に浄法寺の荒屋地区に移った。
享保年間に南部藩より二人扶持を与えられてお抱え木地師となり、盛岡に移住した。

② 志戸平の佐々木一家

佐々木家は代々花巻城の家老職を務めていたが、南部利直候（1576～1632）が慶長18年に花巻城に入城したあと意見が対立して二子城へまわされた。これを快しとせず、城を去って志戸平に移った。その初代覚平より志戸平で木地を始めた。

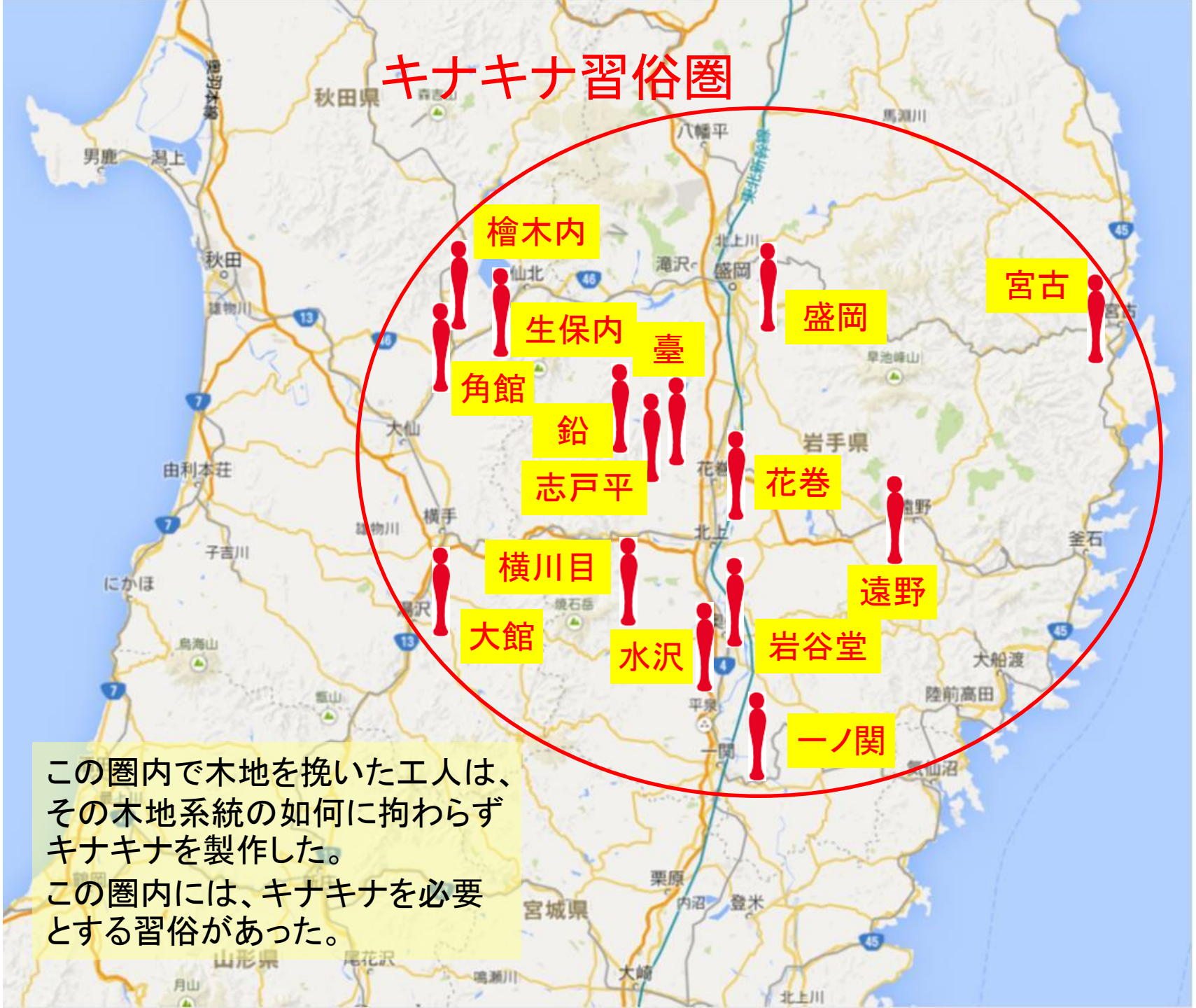
③ 傘ロクロ師

花巻は京都、岐阜、金沢などの並んで、江戸末期から明治にかけて和傘の産地として知られた。傘のロクロを挽く工人も多くいた。

④ 他産地からの影響や県の産業振興政策によるこけし

a. 鳴子から来たこけし工人とその影響
b. 青根で学んだ照井音治
c. 工業試験場の技師の図案
d. 業者によるこけし

キナキナ習俗圏



この圏内で木地を挽いた工人は、
その木地系統の如何に拘わらず
キナキナを製作した。
この圏内には、キナキナを必要
とする習俗があった。

まとめ

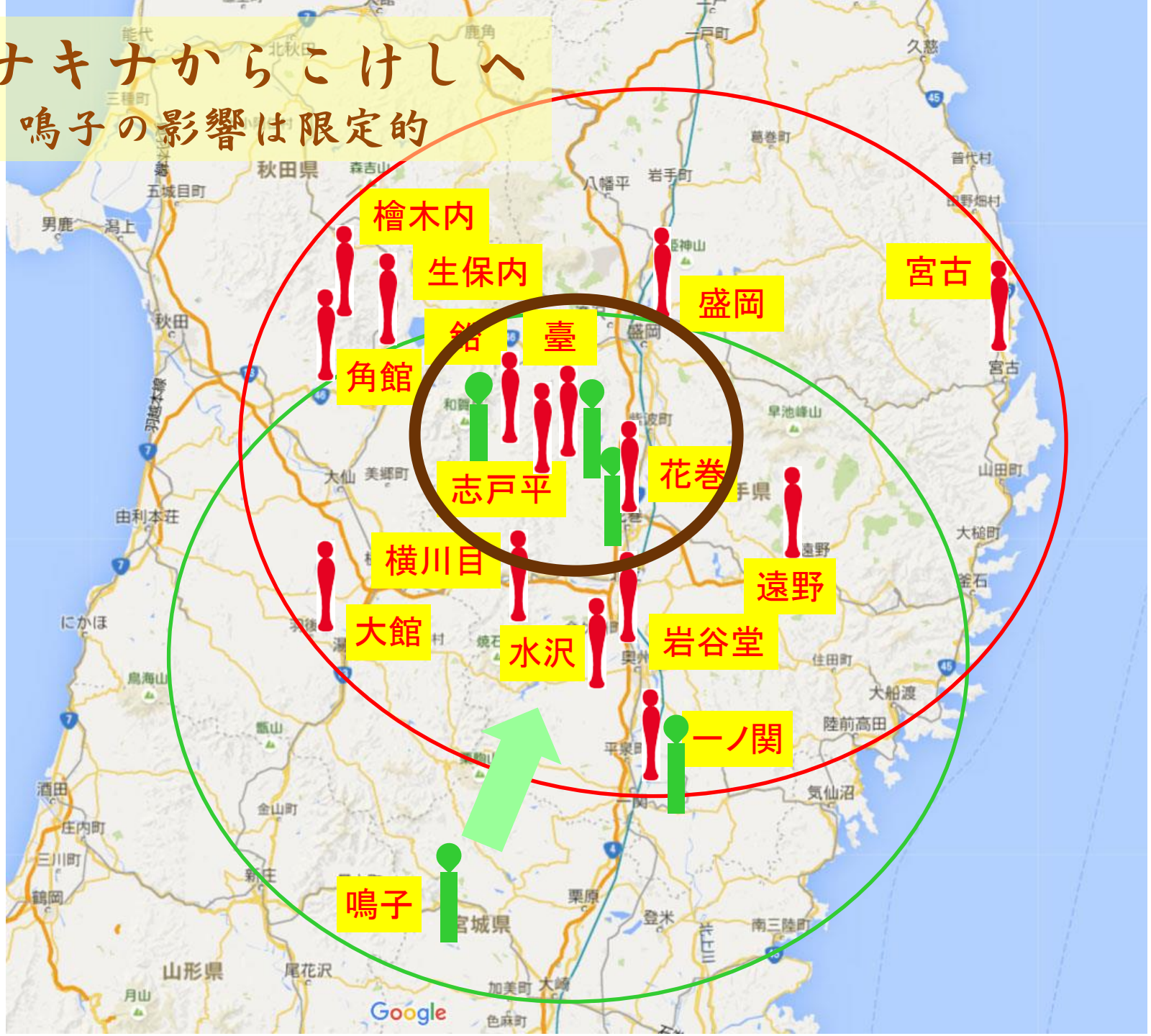
キナキナからこけしへの進化

1. キナキナはキナキナ習俗圏であればいかなる種類の木地師であれ製作した。
2. キナキナ習俗圏で顔の描彩を行ったり、胴に花模様を描くようになったのは、花巻近辺の温泉、臺、志戸平、鉛などである。
3. おそらく最初に描彩を付したこけしを製作したのは志戸平の佐々木与市（明治初年か）、臺の鎌田千代松であろう（明治10年ころ）。
4. 厳密に鳴子こけしを写した訳ではないが、鳴子工人の流入が、こけしへの進化の第二段を促した要因となったであろう。完全な鳴子系の分派にならなかったのはキナキナから派生した前段階があったからであろう。
5. こけしへの進化は、湯治場である温泉においてしか起こらなかった。都市部はキナキナのままにとどまった。

キナキナからこけしへの第一歩を踏み出したもの

キナキナからこけしへ

鳴子の影響は限定的



南部こけしの世界

完